

荒木康久先生を偲んで

このたび、本会名誉会員である荒木康久先生が、2025年10月21日、享年82歳にてご逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

荒木先生は、日本臨床エンブリオロジスト学会の創設および発展に深く関わられ、胚培養士が学びを深め、互いに研鑽し合う場の礎を築かれました。また、先生のご指導のもとで学び、影響を受けた多くのエンブリオロジストが、現在も全国各地で生殖医療の発展に貢献しています。温厚で誠実なお人柄と、先見性に富んだご指導は、多くの後進の心に深く刻まれております。

ここに改めて、荒木康久先生の卓越したご功績に深い敬意と感謝を表し、心より追悼の意を捧げます。

本特集では、先生のご功績を偲び、その足跡を振り返るとともに、先生と共に生殖医療の黎明期を歩んでこられた先生方より寄せられた追悼文を掲載いたします。

荒木 康久 先生 ご略歴

出身地 鳥取県

1943年 4月8日 生まれ

1964年 北野高等学校卒業

1968年 岩手大学農学部畜産学科卒業

1968年 群馬大学医学部（産婦人科教室・生理学教室）勤務

1972年－1993年 産科婦人科 佐藤病院 勤務

1989年 医学博士取得（群馬大学）

1993年 オーストラリア（PIVET Medical Centre）にて生殖医療研修

1993年 中央クリニック高度医療技術研究所 所長（栃木県）

1998年－1999年 The Park Hospital Centre for Assisted Reproduction 研究員（英国）

1999年 高度生殖医療技術研究所（ARMT） 所長、顧問（群馬県）

2014年 日本リプロジェネティクス株式会社 代表取締役

2015年－2019年 群馬パース大学検査技術学科 教授

2019年 群馬パース大学大学院保健科学研究科 教授

2025年 10月21日 逝去（享年82歳）



荒木 康久 先生のご逝去に際して

みなとみらい夢クリニック 培養室長
日本臨床エンブリオロジスト学会 理事長
家田 祥子

このたび、本会名誉会員であり、群馬パース大学大学院保健科学部 教授・高度生殖医療技術研究所（ARMT）顧問の荒木 康久 先生がご逝去されました。

先生のご訃報に接し、深い悲しみとともに、謹んで哀悼の意を表します。

荒木先生は、日本のエンブリオロジストの発展において欠かすことのできない存在でした。常に若い世代に目を向け、エンブリオロジストの未来を真剣に考えておられました。

日本における生殖補助医療（ART）の黎明期より、胚培養技術の研究と臨床応用に尽力され、今日の日本の生殖医療の礎を築かれました。また、高度生殖医療技術研究所を拠点に全国の医療機関への技術支援と人材育成に尽力され、群馬パース大学では教授として多くの胚培養士や研究者の教育に携わられました。先生は「生命のはじまりに携わる者としての誇りと責任」を重んじ、その理念を自ら体現してこられました。その温かく誠実なお人柄、確固たる信念、そして教育と人とのつながりを何よりも大切にされたお姿は、今も多くの培養士の胸に深く刻まれています。

先生から受け継いだ志と理念を胸に、私たちは今後もエンブリオロジスト教育ならびに医療の発展に努めてまいります。

ここに、長年にわたる荒木康久先生のご功績に深く敬意を表し、学会を代表して心からの感謝と哀悼の意を捧げます。改めまして、荒木先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

荒木康久氏に送る言葉

元顧問 久保 春海

本日は荒木康久氏を偲び、謹んでお別れの言葉を申し上げます。荒木氏と私の最初の出会いは1993年に栃木の中央クリニックで本山院長と共に紹介されたのが最初の出会いでした。当時は日本で体外受精（IVF）の臨床応用が不妊治療として盛んになり始めたばかりで、私と慶応大学の鈴木秋悦先生が招待されてクリニックと併設された先端医療技術研究所へ見学に参りました。そこの所長をされていたのが荒木氏であり、彼はオーストラリアで生殖医療の研修をして、日本で生殖医療技術を発展させるために研究所を立ち上げたようでした。荒木氏の研究に対する態度は大変に真摯かつ誠実で、常に周囲への配慮を忘れないような方とお見受けいたしました。どのような場面でも落ち着いて状況を見つめ着実に生殖研究の方向性を見極めておられました。私と荒木氏は年齢が近く、彼とご一緒した日々の中で厳しさの中にも温かさがあり、そんなお人柄がとても印象に残っております。荒木氏が生殖医学研究の中で残された功績は数え上げれば限りありませんが、形としてだけでなく、多くの研究仲間や後輩の一人ひとりの心の中にも深く刻まれていることでしょう。日本臨床エンブリオロジスト学会の元顧問として、また本学会の創立者のおひとりである故鈴木秋悦先生に代わりまして、荒木氏の本学会に対する偉大な功績と果たしてこられた役割に対して、衷心より感謝申し上げます。

荒木康久先生を偲んで

IVF 大阪クリニック院長

顧問 福田 愛作

皆さんご存知の荒木先生は体外受精の培養に関する指導者というイメージだと思います。そして、明るいお人柄で独特の甲高い声でいつも周りの方々に気軽の声を掛けられていました。臨床エンブリオロジスト研究会（現、日本臨床エンブリオロジスト学会）を鈴木秋悦先生と共に立ち上げられ、体外受精の培養室技術の向上とエンブリオロジストの教育と地位の向上のために奮闘されました。

私と荒木先生との初めての出会いは1999年でした。私が米国のHCLD保持者だということで臨床エンブリオロジストの会（現、日本臨床エンブリオロジスト学会）での講演を頼まれたのが始まりです。その後、私が鈴木秋悦先生と共に同学会顧問に就任したことで先生と親しくお話する機会が多くなりました。その後は学会の度に先生と2人で深夜までお酒を飲むのが恒例となり、例年の楽しみともなりました。その時にはお互いの生い立ちや人生についてよくお話をしました。先生は生殖医療に並々ならぬ情熱を傾けておられました。特に培養技術の研究開発やエンブリオロジスト教育に熱心であるだけでなく、エンブリオロジストのアイデンティティー確立に心血を注がれていました。そこで生まれたのが“認定臨床エンブリオロジスト”の資格制度です。その後の歴史は皆さまご承知の通りです。

荒木先生はいつも朗らかで明るい方でした。しかし、先生は大変な苦労人で努力家でした。地元の中学を卒業後大阪の電機工場で働きながら夜間高校を卒業し、岩手大学農学部に進学され群馬大学にて医学博士を取得されました。その間にオーストラリアでの研修や短期間の英国留学も経験されています。体外受精の世界で大活躍された後には群馬パース大学の教授に就任されました。退職後はがん治療を受けておられましたが、かねてからの夢であった自転車での日本一周を、がん治療を受けながら完遂されました。

先生からは折に触れお手紙を頂き、その都度大きな感動そして勇気と元気を分けて頂きました。荒木先生は自分の人生を精一杯楽しまれたと思います。今も天国である甲高いお声で笑っておられると思います。

ご冥福をお祈りいたします。 合掌



2000年8月ハワイで開催された
臨床エンブリオロジスト学会において。

荒木康久先生を偲んで

楠原ウィメンズクリニック

沖津 撰

当学会の産みの親でいらっしゃる荒木康久先生との最初の出会いは、1995年1月でした。歴史に残る阪神淡路大震災のまさに当日、私は栃木県河内郡国分寺町薬師寺（現、栃木県下野市薬師寺）にある中央クリニックでの2週間の研修のためにJR岡山駅から栃木に向けて発とうとしていました。新幹線に乗車しようとしたところ既に出発しているはずの始発の新幹線が定刻を過ぎたにもかかわらず停車しており、一瞬ラッキーと思って乗り込みましたが出発時刻を1時間ほど超過しても出発せず乗客は徐々に降車をはじめ、私も改札付近まで戻るとテレビで神戸の街の様子が映し出されていた。急遽、飛行機を予約し、何とかその日のうちに中央クリニックへ到着することができました。

当時としては当たり前のように作成していた自家製HTFを調合するための10Lのガラス製巨大メスフラスコ、蒸留水を作成するための大きな装置、また胚移植の時間になると15分程度の間隔でカテーテル内にローディングした胚を次々と少し離れた外来に運搬している胚培養士の姿（胚移植は外来に並んだ5,6台の内診台をフルに活用して行われていた）、そして荒木先生が培養室内で行っているICSIのライブ動画をモニター越しで見ながら熱く討論する、今日の日本を代表する著名な生殖医療業界の先駆者の先生方の若かりし頃の様子が今でも記憶の断片として残っています。ART黎明期の日本において、中央クリニックはまさに生殖医療の聖地でした。荒木先生のお人柄は改めて言葉にする必要はありませんが、アグレッシブに仕事に向き合う姿勢、学会では疑問に思ったことがあれば積極的に質問されている姿、我々業界の若輩者が何か相談すると真摯にアドバイスしてくれた姿勢、その生きざまからは誠実性、優しさがあふれていました。私が先生に相談事を聞いていただいた際、先生のいつもの励ましの言葉は、「沖津君、君なら乗り越えられるよ。」だった。当初は何を意味しているのかよくわからなかったけれども、その後さまざまな場面を経験するうちになんとなく先生のおっしゃっていた言葉の意味が分かってきた気がしています。

先生がご逝去され、49日の法要の前日、先生のお宅に連絡し、奥様へ荒木先生のお別れの会を開催したい旨相談したところ、「関わりのあった方々に貴重な時間と労力を使っていただくのは申し訳ない。全てお断りするように。」との先生の遺言をお伝えいただきました。とても先生らしいと思いました。

今、後輩の一人として荒木康久先生の遺志を受け継ぎ、先生ほどアグレッシブな行動力はありませんが、日本における胚培養士の社会的地位の確立、日本における胚培養関連技術の発展に微力ながら、自分のできることに努めていきたいと思う。



追悼

日本臨床エンブリオロジスト学会 元理事長
株式会社 IVF ラボ 代表取締役
武田 信好

突然の訃報に接し、深い悲しみとともに筆を執っております。

昨年夏(2025年7月)にメールでやり取りをさせていただいた際には、お元気な様子でいらっしやっただけに、いまだに信じ難い思いであります。

先生はこれまで、日本における胚培養士の養成および地位向上のために多大なるご尽力をされ、「臨床エンブリオロジストの会」を設立(1996年)されるとともに、それを現在の日本臨床エンブリオロジスト学会(2005年)へと発展させられました。また、自ら高度生殖医療技術研究所を設立され、エンブリオロジストの技術向上と人材育成に尽力され、多くの胚培養士を育ててこられました。先生のご功績は計り知れません。私にとりましても、先生は起業のきっかけであり、常に目標とすべき存在でございました。

先生と初めて言葉を交わさせていただいたのは、私がエンブリオロジスト研究会の理事に就任した折であったと記憶しております。初めて出席した理事会において、上京間もなく知己もいなかった私に、先生はにこやかな笑顔でお声を掛けてくださり、その温かなお人柄に深く安堵したことを今でも鮮明に覚えております。その後もお目にかかるたびに、常に温かいお言葉を賜りました。

思い出深い出来事の一つとして、2002年にシアトルで開催されたASRMに参加した際の報告の折、ある演題について先生が倫理的観点から鋭いご意見を述べられ、議論が白熱したことがございました。その真摯な姿勢に触れ、改めて先生がいかに真剣に生殖医療と向き合っておられたかを実感し、深く感銘を受けた次第です。

先生の誰に対しても分け隔てなく向けられる温かな笑顔と、さりげないお気遣いの数々は、これからも私どもの心の中で生きてまいります。先生とともに過ごさせていただいた時間は、かけがえのない宝物でございます。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、深甚なる感謝の意を捧げ、ここに謹んで追悼の言葉とさせていただきます。

荒木康久 先生 追悼の辞

リプロダクションクリニック大阪・東京

水田 真平

世界の生殖医療、特に胚培養の分野において長年にわたり精力的にご活躍された荒木康久先生がご逝去されたとの報に接し、心よりお悔やみ申し上げます。

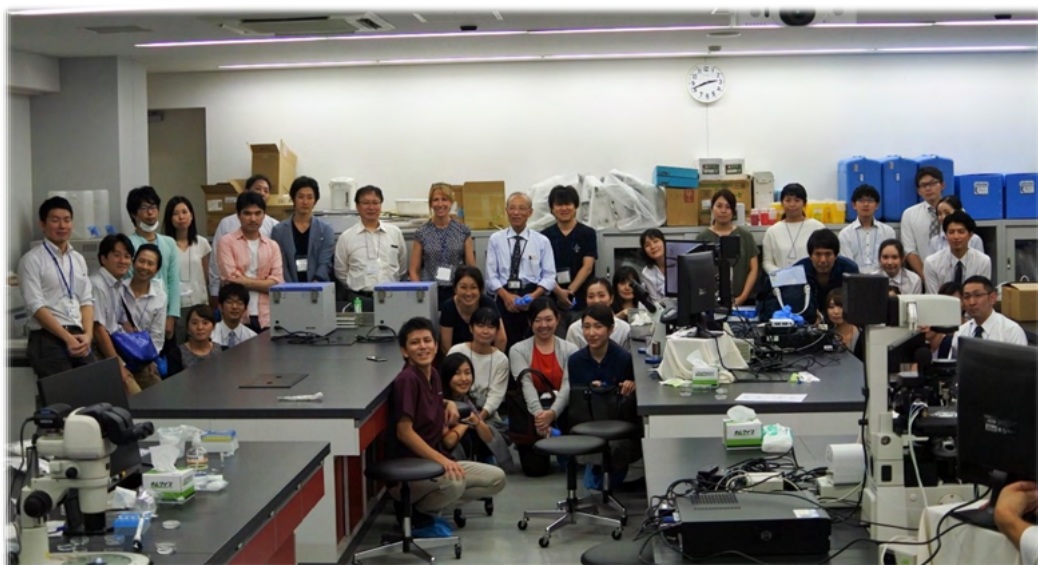
荒木先生は、私にとって胚培養士として大先輩であり、父のような存在でした。私が20代の頃から常に気さくに声をかけてくださり、どれほど複雑な質問や悩みであっても、時間を惜しまず丁寧に向き合ってくださいました。何より、先生とお話しした後には必ず笑顔と元気をいただける——そんな不思議な力を持った方でした。そのお人柄を尋ねられた際、私はよく「徳」が服を着て歩いているような方です」とお答えしていました。そう迷いなく言い切れる方は、人生の中でもそう多く出会えるものではありません。先生の周囲に常に笑顔に溢れ、その光景は今でもはっきりと目に浮かびます。

2015年から群馬で先生が主催された「エンブリオロジストのためのPGS/PGDを学ぶ会」には、立ち上げ当初よりお声がけいただき、数え切れないほど多くの学びを得ました。そして何より、先生が立場を超えて私たちを「仲間」と呼び、共に目指す方向を語ってくださったことは、当時の私の大きな自信と活力につながりました。PGTや共同研究を通じて共に過ごした時間は、今でも大切な宝物です。

日本リプロジェネティクスでのお仕事を終えられた後も、先生は闘病の最中であることを感じさせず、「79歳で日本一周を自転車で達成」「80歳で四国八十八ヶ所の徒歩巡礼を成就」と、いつも前向きな近況を伝えてくださいました。その裏にあったであろう体調面のご苦労は計り知れませんが、どんな時も周囲に力を与える姿勢は生涯変わらないものでした。

これからも先生が切り拓いてくださった胚培養士の道を絶やすことなく、不妊で悩む方々、そして次の世代の胚培養士のために、私自身も力を尽くしてまいります。これまで温かく導き、仲間に加えていただいたことに深く感謝申し上げます。わずかな期間ではありましたが、先生と同じ時間を共有し、共に仕事できたことを心から誇りに思います。

どうか私たちにこの先を託していただき、安らかにお眠りください。



写真ギャラリー



(C)日本臨床エンブリオロジスト学会



78歳ですべての職を退かれた後、学生時代からの夢であった自転車による日本一周を、180日間かけて成し遂げられました。さらに80歳の時には、四国八十八カ所を徒歩で巡礼されるなど、晩年まで精力的に歩み続けられました。



追悼に寄せて

— 荒木先生の志を未来へ —

荒木先生のご功績と志を受け継ぎ、日本臨床エンブリオロジスト学会は今後も生殖医療の発展とエンブリオロジストの育成に努めてまいります。

